

たまいたま

川柳

総会の報告



千鳥ヶ淵

令和4年 (2022年)
4月号 (No.749)

日川協加盟

巻頭言

歌謡性(うたがた)

若者の読書離れと言われる中、それでも各種の出版物は潤沢である。多読多作を奨励(?) されている川柳界では、各種の発行誌や大会報も多く、川柳愛好家は各様な句を読むことが出来る。しかし、読むことはするが声に出して詠ずることはどうだろう。以前から疑問があった。

上代の口承とか伝承による歌謡は、記載文字の不整備な時代からあった。集団生活を営む中で、自然や神を畏敬して農耕や狩猟に従事する庶民には、筆記の用紙や用具が一般的ではなかったであろう。口承や暗唱でひろまった歌謡に、情感を込めた曲節をつけて、素朴に歌い踊ったのであろう風景が想像される。現代なら民謡の世界であろうか。

願法 みつる

日日是好

現代、歌謡・舞踊の世界は百花繚乱である。しかし文学部門での歌謡性が見当たらない(俗曲の世界をどの様に位置づけるかは知らないが)。新年の歌会始の様子には庶民性がない。また短歌や俳句の大会での発表会では、管見ながら披講の調子は棒読みであり、情感は感じられない。

往時の川柳界に詳しい通人の島田駱駝舟氏が、柳誌「銀河」の一月号で「披講は歌?」の達文を載せておられる。全く同感である。世には独特のリズム感で披講をされる川柳人も居られる。下手な句も披講次第では名句に聞こえるとも言われる。楽しき哉川柳である。

散歩には磁石必携北帰行
さよならを言わせぬ鬼の高笑い
高齢の車になびくむしろ旗
おさなごの耳学問に教えられ
ウィルスの見えぬ色香に恋の闇
すごいお人だ亀になりきる
ウィルスが飛ぶ澄んだ青空
ペダルが二つ思案乱れる
返礼の品十と六文
上演停止不死身ラマンチャ